

令和 4 年 5 月 4 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12552

研究課題名(和文)シェイクスピア生誕地のLiterary Tourism マリー・コレリを中心に

研究課題名(英文)Literary Tourism in Shakespeare's Birthplace: The Case of Marie Corelli

研究代表者

桐山 恵子(Kiriyama, Keiko)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：50432597

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ヴィクトリア朝ベストセラー作家のマリー・コレリが、シェイクスピア生誕地であるストラットフォード・アポン・エイボンの観光地化にいかに関与したかを考察するものであった。研究年度途中でイギリスへの渡航が不可となり、当初予定していた通りに計画が進展しなかった点は残念だったが、それゆえに「リテラリー・ツーリズム」の観点以外からの新しい研究課題を発見することができた。たとえば黒岩涙香や江戸川乱歩によるコレリ翻案小説に注目することにより日本におけるコレリ受容を明らかにした。さらにコレリを主役に描いたBBCラジオドラマ脚本を分析することにより、没後約30年のコレリ評価の一端を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ヴィクトリア女王に次いで名の知られたイギリス人女性」と評されるほどの幅広い人気を得ていたコレリは、大衆小説家としての側面が強調され、批評の場で軽視されることも多かった。そこで本研究では、ストラットフォード・アポン・エイボンの観光客誘致に大きな貢献をなしたコレリの文学的活動に着目し、「リテラリー・ツーリズム」の観点から考察を行った。現地調査で発見した資料をもとに、当地での彼女の歴史的建造物保存活動の詳細を明らかにした。さらに日本語のコレリ翻案小説を紹介したり、BBCラジオドラマの考察により没後のコレリ評価のありようを示したりすることにより、既存のコレリ研究に新たな視座を加えることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine how Marie Corelli, a Victorian bestselling-novelist, contributed to the tourism in Stratford-upon-Avon, Shakespeare's birthplace. My original plan of "Literary Tourism" research has to be modified owing to the coronavirus, but my several papers provide a new perspective on the previous Corelli's study. On the basis of documents collected in the Shakespeare Institute, I explore Japanese adapted tales from Corelli's fiction prevailed among the Japanese people from the Meiji era to the Showa era or analyze the BBC Radio Drama scenario broadcasted in 1955, describing Marie Corelli's miraculous resurrection in London 30 years after her death.

研究分野：Literary Tourism (文学的観光)

キーワード：Marie Corelli Literary Tourism Shakespeare Stratford upon Avon BBC Radio Drama

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「リテラリー・ツーリズム」(文学的な興味に基づく観光、たとえば作家の伝記的な史実に基づき生誕地などをめぐる観光、作品内で描かれた場所を実際に訪れる観光)研究の端緒を開いた研究書として、2006年に出版された Nicola J. Watson 著、*The Literary Tourist* (Palgrave Macmillan)、あるいは2009年出版、同じく Watson 編著による *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture* (Palgrave Macmillan)が挙げられる。英国各地の観光地化において文学が果たした役割を考察する「リテラリー・ツーリズム」の研究は、今後のさらなる発展が期待できる比較的新しい学問分野である。

研究開始時点ですでにある程度の進捗がみられた研究課題として、ウィリアム・ワーズワスの詩によって名を馳せた「湖水地方のツーリズム研究」、あるいはウォルター・スコットの小説がベストセラーとなったことにより、作品内で描かれた各地を読者が巡礼した過程に着目する「スコット・カントリー創成の研究」、あるいはチャールズ・ディケンズの関連史跡および作品内で描かれたロンドンの下町を訪ねる「ディケンズにおけるロンドン研究」などが挙げられる。

上記の研究に加えて、「ストラトフォード・アポン・エイボン観光地化におけるシェイクスピア研究」においても、すでに Michael Rosenthal による論稿“Shakespeare's Birthplace at Stratford: Bardolatry Reconsidered” (*Writer's Houses and the Making of Memory*, Ed. Harald Hendrix, Routledge, 2008. 31-44)や Julia Thomas による *Shakespeare's Shrine: The Bard's Birthplace and the Invention of Stratford-upon-Avon* (U of Pennsylvania P, 2012)がある。Rosenthal や Thomas の論では、ストラトフォード・アポン・エイボンが観光地への道のりをたどるきっかけとなった、俳優ディヴィッド・ギャリックによるシェイクスピア生誕200年記念祭の詳細や、シェイクスピア生家や墓地、アン・ハザウェイ家などの改築の経緯、破損するたびに再生して展示され続けている、シェイクスピアが使用したとされる椅子やスプーン、シェイクスピア劇上演を含む各種のイベントへの言及など、ストラトフォード・アポン・エイボンが観光地として存続してきた様々な要因について考察がなされていた。

2. 研究の目的

本研究では、ストラトフォード・アポン・エイボンの「リテラリー・ツーリズム」に関する Rosenthal や Thomas の論稿で、その名が言及されてはいるものの、彼女が当地の観光地化に果たした多大なる役割に対して、これまでその考察が十分ではなかったと考えられるヴィクトリア朝ベストセラー作家マリー・コレリ (Marie Corelli 1854-1924) に焦点を合わせた。

シェイクスピアへの憧憬を抱いてロンドンから当地に移住してからのコレリは、シェイクスピア関連の歴史的建造物の保存に大きな貢献をなした。たとえば P.T.バーナムがシェイクスピア生家をアトラクションのひとつとしてアメリカで展示することを目的に買い取るうとした時に、ディケンズなどの作家と協力してそれを阻止したり、カーネギー図書館建設によりシェイクスピア生家を含む町並みが破壊されそうになった際には、私財を投じて生家の家屋調査を行い、それが確かにシェイクスピアの生きていた時代に建てられた建造物であることを証明したりした。コレリはそれらの活動にあたって、自身の人気作家としての立場を生かし、新聞や雑誌に関連記事を掲載するだけでなく、自身の小説にストラトフォード・アポン・エイボンを背景として用い、シェイクスピア生誕地および没地としての文学的な観光の価値を訴え続けたのである。

しかしながら既存のコレリ研究では、彼女の作品に大衆小説のレッテルを貼るだけで批評の場で真面目に論じる価値はないとしたり、コレリ自身に対しても、時代遅れの服装を好み、若作りで腐心した風変りな作家として軽視したりする傾向が見られた。そこで本研究では、ストラトフォード・アポン・エイボンに移住後のコレリによる歴史的建造物保存活動に着目し、彼女が当地の観光地化にいかに関与したのかを、言い換えるのなら「文学」はどのように「観光」に寄与することができるのかを「リテラリー・ツーリズム」の観点から考察することを目的とした。

3. 研究の方法

現在、ストラトフォード・アポン・エイボンを訪問する人々にとっての魅力のひとつは、シェイクスピア生家をはじめとする、英国が誇る劇作家とその家族に関する数々の歴史的建造物や史跡を観光することにある。しかしヴィクトリア朝の観光客にとっては、シェイクスピア関連の観光だけではなく、当時、絶大なる人気を獲得していた作家マリー・コレリの住居を見学することも、定番の観光ルートのひとつとなっていた。事実、19世紀のガイドブックには、現在、バーミンガム大学のシェイクスピア・インスティテュートの建物の一部となっているコレリの住居も観光ルートとして組み込まれていた。彼女のイラストや作品からの引用で装飾されたマグカップ、あるいはイタリアから取り寄せたゴンドラでエイボン川を遊覧するコレリが描かれたポストカード、さらにコレリ自身や彼女の住居写真などは、シェイクスピア関連商品と同様に土産物として人気を集め、当地における重要な観光収入のひとつとなっていたのである。コレリ本人がストラトフォード・アポン・エイボンへの観光客の誘致を目指して、おすすめの観光ルートを紹介してみたり、望ましい土産物屋さんを紹介する記事を執筆したりするほどであった。

そこで本研究では、当時の地図やガイドブックなどの資料を用いて、シェイクスピアと同様にコレリもストラトフォード・アポン・エイボンにおける「リテラリー・ツーリズム」に大きく寄与していたことを証明する。さらに当地の歴史的建造物の価値を訴え、その保存に大きな貢献をなした彼女の一連の活動を考察するために、彼女が執筆した記事が掲載されている当時の新聞や雑誌を収集しその分析を行う。資料収集に関しては、すでに言及したシェイクスピア・インスティテュートにコレリに関する多くの貴重な資料が収められている。またアメリカのハーバード大学との交流を象徴するハーバード・ハウスに代表されるように、コレリの活動によって破壊をまぬがれ、今に至るまで良好な保存状態が保たれている建造物の現地調査を行うことにより、現在のストラトフォード・アポン・エイボン観光においてもコレリの果たした役割が重要であったことを明かす。

4. 研究成果

「ヴィクトリア女王生存中、世界で二番目に有名なイギリス人女性」(Brian Masters, *Now Barabbas Was a Rotter: The Extraordinary Life of Marie Corelli*. Hamilton, 1978)とも評されるほどの幅広い人気を誇ったマリー・コレリは、既存の研究では大衆作家としての側面のみが強調され、軽視されることも多かった。そこで本研究では、ストラトフォード・アポン・エイボンの観光客誘致に大きな役割を果たしたコレリに着目し、「リテラリー・ツーリズム」の観点からコレリの考察を行い、「文学」がいかに「観光」に貢献できるのかを研究課題とした。

研究初年度のみストラトフォード・アポン・エイボンでの現地調査を実施することができたが、研究年度途中で感染症蔓延のためイギリスへの渡航が不可となり、当初予定していた通りには計画が進展しなかった点は残念であった。

しかし、それゆえに「リテラリー・ツーリズム」の観点以外からの新しい研究課題を発見することができた。たとえば黒岩涙香や江戸川乱歩の『白髪鬼』はコレリ小説 *Vendetta: A Story of One Forgotten* をもとにした翻案小説であったことに注目することにより、日本におけるコレリ小説の受容状況の一端を明らかにすることができた。その研究成果は拙稿「緑深き原生林へ マリー・コレリ『復讐 忘れられた男の物語』における自然回帰」(共著『幻想と怪奇の英文学 変幻自在編』、春風社、2020年)にて公にすることができた。なおバーミンガム大学のシェイクスピア・インスティテュートで発見した資料のなかには、黒岩涙香の『白髪鬼』をもとにしたお芝居が1907年に明治座で上演された際のチラシも含まれており、日本においてもコレリ作品が人気を博していたことが示された。

さらにシェイクスピア・インスティテュートで発見した有意義な資料のひとつとして、コレリを主演にしたBBCラジオドラマの脚本“The Corelli Comeback: the imaginary return of the Victorian novelist Marie Corelli”がある。これは1955年にBBCラジオのHome Serviceで放送された番組で用いられた脚本であり、存命中、心霊主義者としても知られていたコレリの伝記的事実をふまえて書かれたものである。没後約30年のロンドンに蘇りを果たしたコレリが、新聞社やラジオ局などのマスコミを騒がせるという設定のドラマには、ストラトフォード・アポン・エイボンでの保存運動についてのエピソードも含まれている。しかし脚本内では当地に対するコレリの貢献が正当に評価されているとは言い難く、放送時には彼女の活動が必ずしも好意的に受けとめられていなかったことが明らかとなった。ラジオドラマ脚本の考察

についての研究成果は、拙稿「ベストセラー作家の帰還 BBCラジオドラマ脚本のマリー・コレリ考察」(『主流』第83号、同志社大学英文学会、2022年)にて発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 桐山恵子	4. 巻 第83号
2. 論文標題 「ベストセラー作家の帰還 BBCラジオドラマ脚本のマリー・コレリ考察」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『主流』	6. 最初と最後の頁 29-43頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 桐山恵子、編者：東雅夫、下楠昌哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 466
3. 書名 「緑深き原生林へ マリー・コレリ『復讐 忘れられた男の物語』における自然回帰」、『幻想と怪奇の英文学IV：変幻自在編』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------